

富山県五箇山地方楮地区老年層方言の 動詞派生接尾辞 *-jar-*

黒 木 邦 彦

A Study of Derivational Verb Suffix *-jar-* Which Old Speakers of Kouzu Dialect Use

KUROKI Kunihiro

Abstract : Basically, old speakers of Kouzu (a community of Gokayama area, Toyama prefecture) dialect attach a derivational verb suffix *-jar-* or *-(j)aQsar-* to a verb stem in the following case.

- (1) a. A nominative argument is not the first person ;
b. and a speaker's superior.

Considering (1), we can characterize *-jar-* and *-(j)aQsar-* as honorific. But they also attach the latter to a verb stem when a nominative argument is a speaker's equal. Accordingly to characterize *-jar-* as honorific is only partially correct.

So this paper makes the following questions clear.

- [Main question] What is derivational verb suffix *-jar-* which old speakers of Kouzu dialect use?
—— It represents the relation between a speaker and nominative argument. However we must distinguish *-jar₁-* used for speaker's equals from *-jar₂-* used for speaker's superiors.
- [Sub-question 1] Can we distinguish *-jar₁-* from *-jar₂-* by their formal characteristics? (§2)
—— Yes, we can. *-jar-* in (20) is *-jar₁-* and *-jar-* in (21) is *-jar₂-*, certainly.
- [Sub-question 2] What does *-jar₁-* mean? (§3)
—— It means that a nominative argument is not the first person, and is not a speaker's inferior.

1 はじめに

富山県五箇山^{こうず}地方楮地区 (= 同県南砺市楮) の老年層の方言 (以下 “楮老年層方言”)¹⁾では、次の場合、原則として、動詞派生接尾辞 *-jar-* ないし *-(j)aQsar-*²⁾を動詞語幹に後接させる³⁾。

1) 当方言の資料は、現地での面接と電話での質問によって得た。被調査者の属性は次のとおり。

(A) 生年：1929 年；性別：男性；居住歴：[0-現在] 富山県東砺波郡上平村 同県南砺市；調査年：2009-11 年

(B) 生年：1932 年；性別：男性；居住歴：[0-現在] 富山県東砺波郡上平村 同県南砺市；調査年：2009-10 年

2) 子音動詞語幹に後接する時は *-aQsar-* で、母音動詞語幹に後接する時は *-jaQsar-* で実現する。接尾辞初頭の () 内の音素の (j) は、清瀬 (1971) に言う “連結子音” ないし “連結母音”。

3) 同地区の若年層やよそ者に対しては、同様の条件で *-(r)are-* も使う。ただし、これは近年獲得した語彙のようであるから、本稿では取り上げない。

- (1) a. 主格の項 (Argument; cf. Grimshaw 1990, 影山 1993: §1.4, 2.1) が非 1 人称 (= 2 人称ないし 3 人称) で;
 b. 話し手よりも目上の人物である。

(以下、この条件を“〈目上〉”と略称する)

使用条件 (1) から分かるように、*-jar-* も *-(j)aQsar-* も主格尊敬語⁴⁾である。このことは既に知られており、楮地区を含む五箇山地方における使用の実態は真田 (1978) に詳しい。ただし、前者については次の用法が問題になる。

[浄土真宗を篤く信仰する五箇山地方の人々にとって、「ごぼさま」「お坊さま」は貴い存在。「次郎」は話し手と対等の人物。以下同様]

- (2) a. ごぼさま = が *kak-jar-edo*⁵⁾
 書きなさるけど
 b. ごぼさま = が *age-jar-edo*
 上げなさるけど
- (3) a. 次郎 = が *kak-jar-edo*
 書くけど
 b. 次郎 = が *age-jar-edo*
 上げるけど

(2) のように、*-jar-* は〈目上〉の場合に使う。ところが、(3) のように、主格の項が話し手と対等の人物である (以下、この条件を“〈対等〉”と略称する) 場合も、動詞語幹にこれを後接させることがある。したがって、*-jar-* を主格尊敬語と性格付けるのは部分的には正しいが、必ずしも正確ではない。そこで、本稿では次の問いを解き明かす。

[主問] 楮老年層方言の *-jar-* はどのような動詞派生接尾辞であるか。

[副問 1] 〈対等〉の *-jar-* (以下 “*-jar₁-*”) と 〈目上〉の *-jar-* (以下 “*-jar₂-*”) は、形式の面から区別できるか (§2)。

[副問 2] *-jar₁-* はどのような意味を表すか (§3)。

2 *-jar-* の形式的特徴

本節では、次の問いを解き明かすために、*-jar-* の形式的特徴を観察する。

[副問 1] *-jar₁-* と *-jar₂-* は形式の面から区別できるか。

2.1 子音動詞語幹に後接する *-ijar-*

子音動詞語幹に後接する場合に限られるが、*-jar-* の初頭に *i* を足して *-ijar-* と言えば、主格尊敬語 (= *-jar₂-*) であることが明示できる。

- (4) a. ごぼさま = が *kak-ijar₂-edo*
 b. #次郎 = が *kak-ijar₂-edo*

2.2 動詞語幹複合語に含まれる *-jar-*

動詞語幹語 (= 動詞語幹を基幹とする語) 同士の複合語⁶⁾は、*-jar₁-*/*-jar₂-* を判別するのに良い環境である。

4) “敬語”と言うときの“語”は、‘word’ではなく‘form’を意味する。

5) 語 (word) を形態素 (morpheme) に分析する方法は、服部 (1950)、南 (1962)、Nida (1967²⁾)、清瀬 (1971)、屋名池 (1986; 1987)、宮岡 (2002)、丹羽 (2005) などに学んだ。また、形態素および語の分類にあたっては、服部 (1950)、木部 (1983)、屋名池 (1988)、宮岡 (2002) の研究成果を参照した。

6) 複合動詞と呼ばないのは、(6) を考慮してのことである。

- (5) a. {次郎／＃ごぼさま} = が $[_v[_{VSW1} \text{ kak-jar-i}] + [_{VSW2} \text{ das-edo}]]$
書き出すけど
- b. {次郎／＃ごぼさま} = が $[_v[_{VSW1} \text{ kak-i}] + [_{VSW2} \text{ das-jar-edo}]]$
書き出しなさるけど
- c. {次郎／＃ごぼさま} = が $[_v[_{VSW1} \text{ kak-jar-i}] + [_{VSW2} \text{ das-jar-edo}]]$
書き出しなさるけど
- (6) a. {次郎／＃ごぼさま} = わ $[_N[_{VSW1} \text{ kak-jar-i}] + [_{VSW2} \text{ sugi-}\emptyset]] = \text{zja.}$
書き過ぎだ
- b. *{次郎／＃ごぼさま} = わ $[_N[_{VSW1} \text{ kak-i}] + [_{VSW2} \text{ sugi-jar-i}]] = \text{zja.}$
書き過ぎなさりだ
- c. *{次郎／＃ごぼさま} = わ $[_N[_{VSW1} \text{ kak-jar-i}] + [_{VSW2} \text{ sugi-jar-i}]] = \text{zja.}$
書き過ぎなさりだ

(5 a, 6 a) では〈対等〉で、(5 b) では〈目上〉である。したがって、前者の -jar- は -jar₁- で、後者の -jar- は -jar₂- である。このことから分かるように：

- (7) 動詞語幹複合語を作る場合；
- a. -jar₁- は非末尾語⁷⁾の構成要素にしか；
- b. -jar₂- は末尾語の構成要素にしか出来ない。

なお、(5 c) に示すとおり、-jar- を含む動詞を重ねて、統語的複合動詞 (cf. 影山 1993 : Chap. 3) を作ることもできる⁸⁾。

2.3 -jar- に関する統辞法

本節では、-jar- がどのような動詞接尾辞に接続できるかを観察する。

2.3.1 動詞派生接尾辞との接続

楮地区の老年層は次のような動詞派生接尾辞を使う ((8 a-d) は承接順位が高い (= 第一次動詞語幹に近い) 順)。

- (8) a. -(s)as- ‘～させ (る)’ 〈使役〉, -(s)ase- ‘～させ (る)’ 〈使役〉
- b. -(r)are- ‘～され (る)’ 〈所動〉
- c. -(i)Tor-⁹⁾ ‘～して (る)’ 〈継続〉
- d. -(a)n- ‘～しな (い)’ 〈否定〉, -(i)Tar- ‘～し (た)’ 〈過去〉, -(a)naNdar- ‘～しなかつ (た)’ 〈過去・否定〉
- e. -(i)∅ ‘～し’ 〈名詞語幹化〉

7) 次のように、3 語以上で動詞語幹複合語が形成されることもある。よって、前項／後項の別ではなく、末尾語／非末尾語 (i) で言えば、VSW 3 が末尾語で、その他が非末尾語) の別で呼び分ける。

- (i) a. $[_v[_{VSW1} \text{ kak-i}] + [_{VSW2} \text{ naos-i}] + [_{VSW3} \text{ das-edo}]]$ ‘書き直し出すけど’
- b. $[_N[_{VSW1} \text{ age-}\emptyset] + [_{VSW2} \text{ sokone-}\emptyset] + [_{VSW3} \text{ sugi-}\emptyset]] = \text{zja}$ ‘上げ損ね過ぎだ’

8) -jar- を含む動詞と -jaQsar- を含む動詞でも統語的複合動詞を作ることができる。

- (ii) a. {次郎／＃ごぼさま} = が $[_v[_{V1} \text{ kak-jar-i}] + [_{V2} \text{ das-jaQsar-edo}]]$
書き出しなさるけど
- b. {次郎／＃ごぼさま} = わ $[_v[_{V1} \text{ kak-jar-i}] + [_{V2} \text{ sugi-jaQsar-edo}]]$
書き過ぎなさるけど

9) 清瀬 (1971) に倣い、融合形式を生じさせる接尾辞は、初頭音を大文字で表記する。

楮方言の -(i)Tor- は、東京方言の -(i)Te- ‘～して (る)’ 〈継続〉などとは異なり、s 語幹 (=s で終わる動詞語幹。以下同様) に後接する時も融合形式を作る (e.g. 東京方言: os-+-(i)Te-→os-ite- ‘押して (る)’；楮老年層方言: os-+-(i)Tor-→oitor- ‘押して (る)’)。よって、この接尾辞の音形が -(i)Tor- であるということを保証する例は、実は存在しないのである。ただし、この接尾辞の音形を -Tor- とすると、次の疑問が解決できそうにない。

- (iii) k 語幹, g 語幹, s 語幹に後接する際、なぜ /i/ (いわゆるイ音便；e.g. kaitor-u ‘書いてる’, koidor-u ‘漕いでる’, oitor-u ‘押してる’) が生じるのか。

よって、本稿では、東京方言の -(i)Te- などのように、連結母音 (i) を持つ -(i)Tor- と見なす (-(i)Tar- なども同様)。

f. $-(i)ta_1-$ ‘～した (い)’ 〈形容詞語幹化〉2. 3. 1. 1 $-(s)as-$, $-(s)ase-$ との接続

$-(s)as-$ も $-(s)ase-$ も $-jar-$ には後接できない。

- (9) a.* {次郎／ごほさま} = が $age-jar-as-edo$
 上げ {さ／なさら} せるけど
 b.* {次郎／ごほさま} = が $age-jar-ase-redo$
 上げ {さ／なさら} せるけど

ただし, $-jar-$ は $-(s)as-$ にも $-(s)ase-$ にも後接できる。

- (10) a. {次郎／ごほさま} = が $age-sas-jar-edo$
 上げさせ {なさ} るけど
 b. {次郎／#ごほさま} = が $age-saQs-jar-edo$
 ?//age-sase-jar-edo//
 上げさせるけど
 c. {#次郎／ごほさま} = が $age-sase-jar-edo$
 上げさせなさるけど

(10 b) では〈対等〉で, (10 c) では〈目上〉である。したがって, 前者の $-jar-$ は $-jar_1-$ で, 後者のそれは $-jar_2-$ である。(10 a) では〈目上〉でも〈対等〉でも良いことから, この例の $-jar-$ は $-jar_1-$ とともに $-jar_2-$ とも取れる。(10 b) の $-(s)aQs-$ は $-jar-$ が後接する場合にしか観察されないから, おそらくは不規則形式である。次の点を考慮すると, この形式は $-(s)ase-$ の変異と見るのが妥当に思われる。

- (11) a. $-jar_1-$ (と考えられる $-jar-$) は $-(s)as-$ および $-(s)aQs-$ に後接する。
 b. $-jar_2-$ (と考えられる $-jar-$) は $-(s)as-$ および $-(s)ase-$ に後接する。

2. 3. 1. 2 $-(r)are-$, $-(i)Tor-$ との接続

$-jar-$ は, $-(r)are-$ にも $-(i)Tor-$ にも接続できない。

- (12) a.* {次郎／ごほさま} = が $age-rare-jar-edo$
 上げられ {なさ} るけど
 b.* {次郎／ごほさま} = が $age-jar-are-redo$
 上げ {なさ} られるけど
 (13) a.* {次郎／ごほさま} = が $age-tor-jar-edo$
 上げて {らっしゃ} るけど
 b.* {次郎／ごほさま} = が $age-jaQ-tor-edo$
 //age-jar-iTor-edo//
 上げ {なさっ} てるけど

2. 3. 1. 3 $-(a)n-$, $-(i)Tar-$, $-(a)naNdar-$ との接続

動詞派生接尾辞 $-(a)n-$, $-(i)Tar-$, $-(a)naNdar-$ は, いずれも $-jar-$ に後接できる。主格の項に関して言えば, 〈目上〉でも〈対等〉でも良い。

- (14) a. {次郎／ごほさま} = が $age-jar-an-edo$
 上げ {なさら} ないけど
 b. {次郎／ごほさま} = が $age-jaQ-tar-edo$
 //age-jar-iTar-edo//
 上げ {なさっ} たけど
 c. {次郎／ごほさま} = が $age-jar-anandar-edo$
 上げ {なさら} なかったけど

ただし、*-jar-* は、*-(a)n-*、*-(i)Tar-*、*-(a)naNdar-* のいずれにも後接できない。

- (15) a.* {次郎／ごほさま} = わ *age-n-jar-u*.
 上げ {なさ} ないけど
 b.* {次郎／ごほさま} = わ *age-tar-jar-edo*
 上げ {なさ} たけど
 c.* {次郎／ごほさま} = わ *age-naNdar-jar-edo*
 上げ {なさ} なかったけど

2.3.1.4 名詞語幹化

名詞語幹化動詞派生接尾辞 *-(i)ø* は *-jar-* には後接できない。つまり、*-jar-* 動詞語幹から名詞語幹への派生は不可能である。

- (17) a.* {次郎／ごほさま} = の [_N *hasir-jar-i*]
 走り {なさ}り
 b.* {次郎／ごほさま} = の [_N *kotae-jar-i*]
 答え {なさ}り

2.3.1.5 形容詞語幹化

形容詞語幹化動詞派生接尾辞 *-(i)ta_A-* は *-jar-* に後接できる。つまり、*-jar-* 動詞語幹から *-(i)ta_A-* 形容詞語幹への派生は可能である。主格の項に関して言えば、〈目上〉でも〈対等〉でも良い。

- (16) a. {次郎／ごほさま} = が [_A *kak-jar-ita-i*] = soR = zja.
 書き {なさ}り たいそうだ
 b. {次郎／ごほさま} = が [_A *age-jar-ita-i*] = soR = zja.
 上げ {なさ}り たいそうだ

2.3.2 動詞屈折接尾辞との接続

楮地区の老年層は次のような動詞屈折接尾辞を使う。

- (18) a. 終止形接尾辞 *-(e)ø* ‘～しろ’ 〈命令〉, *-(u)na* ‘～するな’ 〈命令・否定〉, *-(j)o{R}* ‘～しよう’ 〈不確定〉, *-(a)mai* or *-(r)umai* ‘～するまい’ 〈不確定・否定〉
 b. 終止／連体形接尾辞: *-(r)u* ‘～する’ 〈平叙〉
 c. 準体形接尾辞: *-(i)Tari* ‘～したり’ 〈例示〉
 d. 連用形接尾辞: *-(i)nagara* ‘～しながら’ 〈同時並行〉, *-(i)ø* ‘～し’ 〈已然〉, *-(i)Te* ‘～して’ 〈已然〉, *-(a)li{de}* ‘～せずに; ～しないで’ 〈未然〉, *-(r)ja* ‘～すれば’ 〈順接〉, *-(i)TaQte* ‘～したって’ 〈逆接〉, *-(r)edo* ‘～するけど’ 〈譲歩〉
 e. 終止／連体／連用形接尾辞: *-(a)nan* ‘～しなければ {ならな (い)}’ 〈義務〉

(18) の動詞屈折接尾辞はいずれも *-jar-* に後接できる。主格の項に関して言えば、〈目上〉でも〈対等〉でも良い。

- (19) a. {次郎／ごほさま} = が *age-jar-e*.
 上げ {ろ／なさ}い
 b. {次郎／ごほさま} = が *age-jar-o{R}*.
 上げ {なさ} るだろう
 c. {次郎／ごほさま} = が *age-jar-u*.
 上げ {なさ} る
 d. {次郎／ごほさま} = が *age-jaQ-tari*.
//age-jar-Tari//
 上げ {なさ}つ たり

- e. {次郎／ごぼさま} = が $\text{age-jar-i} = \text{wa}$ した。
 上げ {なさり} は
- f. {次郎／ごぼさま} = が age-jar-ja
 上げ {なさ} れば
- g. {次郎／ごぼさま} = が $\text{age-jar-anaN} \{.\}$
 上げ {なさら} なければ {ならな (い)}

2.4 本節のまとめ

以上の観察から, $-\text{jar}_1-$ と $-\text{jar}_2-$ の形式上の違いは次のように纏められる。

- (20) $-\text{jar}_1-$ のうち, 確実に $-\text{jar}_1-$ であるもの
- 動詞語幹複合語の非末尾語に含まれる $-\text{jar}_1-$ (cf. §2.2)。
 - $-(s)\text{aQs-jar}_1-$ ($?(/)-(s)\text{ase-jar}_1-/$) の $-\text{jar}_1-$ (cf. §2.3.1.1)。
- (21) $-\text{jar}_2-$ のうち, 確実に $-\text{jar}_2-$ であるもの
- 「子音動詞語幹に後接する $-\text{ijar}_2-$ (cf. §2.1)。
 - 「動詞語幹複合語の末尾語に含まれる $-\text{jar}_2-$ (cf. §2.2)。

3 $-\text{jar}_1-$ の意味的特徴

本節では次の問いを解き明かす。

〔副問2〕 $-\text{jar}_1-$ はどのような意味を表すか。

不毛な解釈論に陥らないよう, 確実に $-\text{jar}_1-$ に限定して, 考察を進める。よって, 本節で取り上げる $-\text{jar}_1-$ は, 前掲 (20) のものに限られる。

3.1 待遇度に関して

既に確認したとおり, $-\text{jar}_1-$ は〈対等〉の場合にも使う(注意: 〈対等〉であれば, 必ず $-\text{jar}_1-$ を使うというわけではない)。このことから, $-\text{jar}_1-$ は〈対等〉を表す動詞派生接尾辞であると考えられる。この見込みのとおりに, $-\text{jar}_1-$ は次の場合には使用しない。

- (22) 主格の項が話し手よりも目下の人物である場合
- #おら = が 子 = が $[\text{v}_{\text{VSW1}} \text{kak-jar}_1-\text{i}] + [\text{v}_{\text{SW2}} \text{das-edo}]$
 俺の 子が 書き出すけど
 - #おら = が 子 = が $\text{age-saQs-jar}_1-\text{edo}$
 上げさせるけど
- (23) 主格の項が人間ではない場合
- #猫 = が $[\text{v}_{\text{VSW1}} \text{nak-jar}_1-\text{i}] + [\text{v}_{\text{SW2}} \text{tuzuke-tor-u}]$.
 泣き続けてる
 - #雪 = が $[\text{v}_{\text{VSW1}} \text{toke-jar}_1-\text{i}] + [\text{v}_{\text{SW2}} \text{kake-tor-u}]$.
 溶け掛けてる

3.2 人称に関して

しかし, 実は, 〈目上〉の場合も $-\text{jar}_1-$ は使えるのである。

- (24) a. あの ごぼさま = が $[\text{v}_{\text{VSW1}} \text{kak-jar}_1-\text{i}] + [\text{v}_{\text{SW2}} \text{das-edo}]$
 b. あの ごぼさま = わ $[\text{N}_{\text{VSW1}} \text{kak-jar}_1-\text{i}] + [\text{v}_{\text{SW2}} \text{sugi-}\emptyset] = \text{zja}$.
 c. あの ごぼさま = が $\text{age-saQs-jar}_1-\text{edo}$

ただし, それが許されるのは, 次の条件を同時に満たす場合に限られる。

(25) 主格の項は、話し手の発話が聞こえない状況にある。

主格の項が話し手よりも目上の人物であっても、(25)の状況下であれば、主格尊敬語を使わなくても、それほど問題にはならない（おそらく、これは楮方言に限ったことではない）。聞き手はそのことを失礼に思うかもしれないが、「ごぼさま」の耳に入るよりはましである。このことは、次の例における主格尊敬語 *-(j)aQsar-* (cf. §1) の使い方からも知られる。

(26) a. 「ごぼさま」は、話し手の発話が聞こえる状況にある]

ごぼさま = が^s { kak-aQsar / #kak } -u = が^s = か？

b. 「ごぼさま」は、話し手の発話が聞こえない状況にある]

ごぼさま = が^s { kak-aQsar / kak } -u = が^s = か？

3.3 本節のまとめ

-jar₁- の意味を一言で定義するのは容易ではない。一見すると、これは〈対等〉を表す動詞派生接尾辞のようであるが、次の場合も使えるという点は看過できない。

(27) a. 主格の項は3人称で；

b. 話し手よりも目上の人物であるが；

c. 話し手の発話が聞こえない状況にある。

よって、筆者は *-jar₁-* の意味を次のように定義する。

(28) a. 主格の項が非1人称で；

b. 話し手よりも目下の人物ではないという意味。

(28) のように定義すれば、次の例もうまく処理できる。

(29) 「ごぼさま」は、話し手の発話が聞こえる状況にある]

a. #ごぼさま = が^s [_v[_{vsw1} kak-*jar₁*-i] + [_{vsw2} das-*edo*]]

b. #ごぼさま = が^s age-saQs-*jar₁*-*edo*

-jar₁- は、主格尊敬語 *-jar₂-*、*-(j)aQsar-* のように〈目上〉を表すわけではない。そのため、(29)の発話では待遇度が足らず、話し手は「ごぼさま」に失礼に思われる。(29)の状況では、次のように *-jar₂-* ないし *-(j)aQsar-* を使うのが適切である。

(30) 「ごぼさま」は、話し手の発話が聞こえる状況にある]

a. 「ごぼさま = が^s [_v[_{vsw1} kak-i] + [_{vsw2} das- { *jar₂* / *aQsar* } -*edo*]]

b. 「ごぼさま = が^s age-sase- { *jar₂* / *jaQsar* } -*edo*

4 結 論

本稿では次の問いを解き明かした。

〔主問〕 楮老年層方言の *-jar-* はどのような動詞派生接尾辞であるか。

——話し手と主格の項の関係を表す動詞派生接尾辞。ただし、〈対等〉の *-jar₁-* と〈同上〉の *-jar₂-* は区別しなければならない。

〔副問1〕 *-jar₁-* と *-jar₂-* は形式の面から区別できるか (§2)。

——できる。(20) (p.6) の *-jar-* は確実に *-jar₁-* で、(21) (p.6) のそれは確実に *-jar₂-* である。

〔副問2〕 *-jar₁-* はどのような意味を表すか (§3)。

——主格の項が非1人称で、話し手よりも目下の人物ではないという意味。

記号一覧

• - : 接辞 (= 附属形式) の境界 • = : 接語 (= 附属語) の境界 • // … // : 基底形 • * : 文法的に不適格 • # : 意味的に不適格 • A(B)C : AC と ABC は異形態の関係にある • AB or CD : と AB と CD は自由変異の関係 • A |B| C : と AC or ABC に同じ • -_A- : 形容詞語幹

略号一覧

・A：形容詞 ・N：名詞 ・V：動詞 ・VSW：動詞語幹語

参 考 文 献

- 影山太郎（1993）『文法と語形成』，ひつじ書房
- 菊地康人（1994）『敬語』，角川書店〔文庫版：講談社学術文庫 1268，講談社，1997年〕
- 木部暢子（1983）「付属語のアクセントについて」，『国語学』134，pp.23-42
- 清瀬義三郎則府（1971）「連結子音と連結母音と——日本語動詞無活用論——」，『国語学』86，pp.42-56，国語学会
- 真田信治（1978）「越中五ヶ山郷における待遇表現の実態——場面設定による全員調査から——」，北原保雄（編）『論集日本語研究9 敬語』，pp.232-48，有精堂出版
- 丹羽一彌（2005）『日本語動詞述語文の構造』，笠間書院
- 服部四郎（1950）「附属語と附属形式」，『言語研究』15，pp.1-26，日本言語学会〔再録：服部四郎（1960）『言語学の方法』，pp.461-91，岩波書店〕
- 南不二男（1962）「三 文法」，国語学会（編）『方言学概説』（訂正増補版），pp.209-55，武蔵野書院
- （1974）『現代日本語の構造』，大修館書店
- 宮岡伯人（2002）『語とは何か エスキモー語から日本語をみる』，三省堂
- 屋名池誠（1986）「述部構造——現代東京方言述部の形態＝構文論的記述——」，『松村明教授古稀記念 国語研究論集』，pp.583-601，明治書院
- （1987）「活用——現代東京方言述部の形態＝構文論的記述〔2〕——」，『学苑』565，pp.194-208（左開き），昭和女子大学
- （1988）「語——現代東京方言述部の形態＝構文論的記述〔4〕——」，『学苑』577，pp.199-209（左開き），昭和女子大学
- Grimshaw, Jane. (1990). *Argument structure*. MIT Press.
- Nida, Eugene A. [1949] (1967²). *Morphology : The Descriptive Analysis of Words*. Ann Arbor : University of Michigan Press.